

Payāga-patiṭṭhānaについて

岩井昌悟

0. はじめに¹

『南伝大蔵経』第一卷（律蔵1）の第一波羅夷の因縁譚（毘蘭若品の末尾）に以下の件がある。

その時世尊は随意に毘蘭若に住し給ひて、須離の町、^{ソーレツヤ}僧伽尸國、^{サンカッサ}カンナクツチャ国に入り、更に^{バヤーガ}波夜迦の渡場に到り、其処より恒河を渡りて^{パーラーナシー}波羅奈に到り給へり²。

原文は以下の通り。

Vin III 11 : atha kho bhagavā verañjāyaṃ yathābhirantaṃ viharitvā anupagamma soreyyaṃ saṅkassaṃ kaṇṇakujaṃ yena payāgapatiṭṭhānaṃ ten' upasaṅkamaṃ ; upasaṅkamtivā payāgapatiṭṭhāne gaṅgaṃ nadiṃ uttaritvā yena bārāṇasī tad avasari³.

それから世尊はヴェーランジャーに随意の間住し、ソーレツヤ、サンカッサ、カンナクツチャに立ち寄らずに⁴、バヤーガ・パティッターナ

¹ 本論は現在、森 章司東洋大学名誉教授を代表者とする釈尊伝研究会が中央学術研究所の支援を受けて継続中の「原始仏教聖典による釈尊伝の研究」の一環として位置づけられる。森 章司・金子芳夫著「原始仏教時代の通商・遊行ルート」『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究』第20号、中央学術研究所、2015年 pp. 37-38もあわせて参照されたい。

² 『南伝大蔵経』第一卷、p. 17. 該当箇所訳者は上田天瑞。

³ なお以下、本稿において特に言及がない場合、パーリ語テキストはChatṭha Saṅgāyana Tipiṭaka 4.0 (CST 4.0 ; Text copyright © 1995 Vipassana Research Institute) にもとづく。但し示した巻・頁はPTSのテキストのものである。またパーリ語の文献名については略号を用いたが、これはCPDのものに準じた（略号表はhttp://pali.hum.ku.dk/cpd/intro/voll_epileg_abbrev_texts.htmlで見ることができる）。

に近づいた。近づいてからパヤーガ・パティッターナにおいてガンガー川を渡り、ヴェーサーリーに至った。

Spは以下のように註釈する。

Sp. I. 201 : atha kho bhagavā verañjāyaṃ yathābhirantaṃ viharitvā ti yathājjhāsayaṃ yathārucitaṃ vāsaṃ vasitvā verañjāya nikkhamitvā mahāmaṇḍale cārikāya caraṇakāle gantabbaṃ buddhavīthi pahāya dubbhikkhadosena kilantaṃ bhikkhusaṅghaṃ ujunā va maggena gahetvā gantukāmo soreyyādīni anupagamma payāgapatiṭṭhānaṃ gantvā tattha gaṅgaṃ nadiṃ uttaritvā yena bārāṇasī tad avasari. tena avasari tad avasari. tatrā pi yathājjhāsayaṃ viharitvā vesāliṃ agamāsi. tena vuttaṃ — “anupagamma soreyyaṃ ... pe ... vesāliyaṃ viharati mahāvane kūṭāgārasālāyan” ti.

「それから世尊はヴェーランジャーに随意の間住し」とは、意向のままに、好むままの滞在期間を過ぎた後に、ヴェーランジャーから出立して、大領域（長距離）の遊行を遊行する時に踏むべき仏路を捨てて、〔ヴェーランジャーで〕乞食が得にくかったせいで疲れている比丘サンガを、まっすぐな路を連れて行こうと考えて、ソーレツヤなどに寄らずに⁵、パヤーガ・パティッターナに行き、そこでガンガー川を渡ってパーラーナシーに入った。そこでも意向のままに滞在し、ヴェーサーリーに行った。それゆえ「ソーレツヤ、サンカッサ、カンナクツジャに立ち寄らずに、パヤーガ・パティッターナに近づいた。近づいてからパヤーガ・パティッターナにおいてガンガー川を渡り、ヴェーサーリーに至った」と言われるのである。

「パヤーガ・パティッターナ」については何も教えてくれない説明である。

⁴ 文脈からSpが意図しているのはanu-upagammaではなくa-upagammaであるのでそれに従う。『南伝』は「…カンナクツチャ国に入り」とするのでSpを無視したことは明らかである。とはいえ実際のところは、立ち寄らなかった場所の地名を挙げるのはおかしい。聖典の意図するところはanu-upagammaであろう。

⁵ この文脈からするとソーレツヤなどに立ち寄るコースが「仏路」のようである。

『南伝大藏経』で「波夜迦の渡場」と訳された語は、原文では 'payāgapatiṭṭhāna' である。'-patiṭṭhāna' (Skt. : pratiṣṭhāna) に「渡場」の意味はないため、誤訳が疑われる。「渡場」は tiṭṭha (Skt. : tīrtha) である。

これを I. B. Horner は以下のように英訳している。

Then the Lord, having remained at Verañjā for as long as he found suitable, returning by Soreyya, Saṅkassa and Kaṇṇakujja came to Payāgapatiṭṭhāna, and having come to Payāgapatiṭṭhāna and crossing the river Ganges, he went down to Benares⁶.

そして I. B. Horner は 'Payāgapatiṭṭhāna' に脚注を付し、「今のイッラーハーバードである」(The modern Allahabad.) と記している。

なお『善見律毘婆沙』は以下のものである。

爾時世尊於蘭若中。停三日入佛境界。觀諸比丘九十日中日食馬麥。身體羸瘦不堪遠涉。直路而去到須離國。從須離去取波夜伽處。到已即渡大江。渡已便向婆羅那私國。到已從此而去到毘舍離城⁷。

原文が今のパーリテキストと同じであったとは限らない。「波夜伽處」から想定される原語は *payāgaṭṭhāna' である。

なお『五分律』(大正22、2b) は「爾時世尊說此偈已。更爲說法示教利喜。從坐而起向僧伽尸國。展轉遊歷。後之毘舍離。住彌猴河邊重閣講堂」として該当する地名を挙げない。

Böhtlingk und Roth の *Sanskrit Wörterbuch* の 'pratiṣṭhāna' の語義説明

⁶ *The Book of the Discipline* (Vinaya-Piṭaka), vol. I (Suttavibhaṅga), translated by I. B. Horner, 1938, p. 21. なお returning by Soreyya ... 「ソーレヤ…で向きを変え」は anu-upagamma と読んだか a-upagamma と読んだか微妙な訳である。PTS の *Pali-English Dictionary* の anupagacchati [anu+pa+gacchati] の項に to go or return into とあるので、恐らく前者である。

⁷ 『善見律毘婆沙』(T24, 710c)

のd) に以下のように記されている。

d) N(omen) pr(oprium) einer Stadt am Zusammanfluss der Gaṅgā und Jamunā auf dem linken Ufer der Gaṅgā

Monier-Williamsの*A Sanskrit-English Dictionary*ではもっとわかりやすく‘pratiṭṭhāna’に以下の説明が⁸付されている。

N(ame) of a town at the confluence of the Gaṅgā and Yamunā (on the left bank of the Gaṅgā) opposite to Allāhābad, the capital of the early kings of the lunar dynasty

赤沼 (1967) とDPPNに項目として立てられているPatiṭṭhānaは現在のマハーラーシュトラのPaithanの方のみであり、Payāgaのガンガーをばさんで対岸のPatiṭṭhānaは見失われてしまったのである⁸。

結論を先取りする形になるが、‘-patiṭṭhāna’は「渡し場」ではなく固有名詞の地名であり (今のUttar PradeshのJhūsiにあたる)、また‘Payāgapatiṭṭhāna’をイッターハーバードであると説明するI. B. Hornerも (結果的に正解であるが) 誤解を招く説明であり、‘payāga-patiṭṭhāna’は2つの地名の複合語である。本論の目的はこの複合語のニュアンスを明確にすることにある。

なお上記のVinの記事で、釈尊がガンガーを渡った箇所は恐らく現在

⁸ しかしRhys Davids (1903, 30n5) はThere was an older and more famous Patiṭṭhāna, also ferry, more generally known as Payāga, on the site of Allahabad of today. Perhaps this more southern one was named after it.として2つのPatiṭṭhānaを明確に区別している。T. W. リス・デヴィッツ著、中村了昭訳。1984。『仏教時代のインド』大東出版社、p. 233 (39)。

⁹ 2014年度をもって東洋大学文学部教授を退かれた宮本久義先生からたいへん貴重なご教示を頂戴した。ここに記して衷心より御礼申し上げます。Dubey (2001) を拝借した上にSurendra Bahādur Siṃha ‘Kalākār’, *Prayāga Prasāda*, Prayāga : Satyam Śivam Sundaram Prakāśan, 2007. より以下を訳出してくださったので、ご本人の許可を得て掲載させていただきます。

Shastri Bridgeの架っているあたりではなかったか。それを踏まえれば、この時、釈尊がガンガー北岸を川沿いにパーラーナシーに向かったことがより明確になるであろう⁹。

1. パーリ聖典中のPayāga

パーリ聖典中に‘payāga-patiṭṭhāna’という複合語が出る箇所は、先に挙げたVinの資料一箇所のみである。しかし‘payāga’単独なら以下の箇所
所に言及がある。なお以後titthaは文脈や註釈によって限定できる時に「渡し場」や「沐浴場」の訳語をあてるが、不明な場合はtittha (tīrtha)

「この聖地はブラヤーガ（サンガム）のちょうど正面にあるガンガーの東岸に（現在はブラヤーガの衛星都市の形として）ある。その昔の名称はブラティシュターナプラである。イッラーハーバード・ヴァーラーナシーを結ぶGTロード（註：Grand Trunk Road、グランドトランク・ロード）がそこを両断している。道路の北側はNāī Jhūmsī（新しいジュンスイー）、南側はPurāṇī Jhūmsīという名で知られている。ここには考古学的な観点からたいへん重要な多くの歴史的、宗教的、そして景色のよい場所がある。『マハーバーラタ』ヴァナパルヴァン、85/76、『マツヤブラーナ』110/81、『スカンダブラーナ』所収の『カーシーカンダ』第7章などに、その「マールハートミヤ」（威光書）などの多くの記述が見られる。

ガンガーの東岸に三界に名高いブラティシュターナという都があり、いつの時に
かそれはチャンドラヴァンシャの王たちの首都であった、ということが、ヴァール
ミーキの『ラーマヤナ』や『デーヴィー・バーガヴァタ』などに言及されている。『リ
ンガブラーナ』プールヴールダ（前半）の61章には次のように説かれている。

Budhu（男性）とIlā（女性）からPurūravas、PurūravasからAyu、AyuからNah
uṣa、NahuṣaからYayātiというこれらすべての王たちがここで統治していた。『マハー
バーラタ』ウディヨーガパルヴァンの114章にはヤヤーティの記述が見られ、また詩
聖カーリダーサの有名な戯曲『ヴィクラモールヴァシーヤ』ではブルーラヴァス王
を主人公にしている。

グプタ朝の王たちはカウシャーンビーを自分たちの副首都としていた。近くにあることと宗教的な重要性という理由で、ブラティシュターナプラとも関係していた。西暦1876年には、ここからクマララ・グプタ時代の24の金貨（アシャルフィー）が発見され、また巨大な井戸は「サムッドル・クープ」（大海の井戸）という名で現在も有名である。そのことから、この井戸はサムッドラグプタ王が開削させたか修復させたかと推測される。

と原語のままに表記する。

1-1. MN. I. 39 (Vattha-sutta)¹⁰

bāhukaṃ adhikakkaṃ ca gayaṃ sundarikāṃ api¹¹ ;
sarassatiṃ payāgaṃ ca atho bāhumatiṃ nadim̐ ;
niccam pi bālo pakkhanno¹² kaṃhakammo na sujjhati.

バーフカー川とアディカッカ沐浴場にも、ガヤー沐浴場にも、スندگانリカー川にも、サラッサティー川とパヤーガ沐浴場にも、そしてバーフマティー川にも常に愚者は飛び込むが、黒業は浄まらない。

kiṃ sundarikā karissati kiṃ payāgo¹³ kiṃ bāhukā nadī ;
verim̐ katakibbisam̐ naram̐ na hi nam̐ sodhaye pāpakammaṃ.

スندگانリカー川が、パヤーガ沐浴場が、バーフカー川が何をかする。なぜなら〔それらは¹⁴〕恨みをいだけ犯罪者を、悪業をなす者を浄めはしないから。

このパヤーガに付された註は以下である。

MN-a. I. 178 : tattha adhikakkaṃ ti nhānasambhāravasena
laddhavohāraṃ ekaṃ titthaṃ vuccati. gayā ti pi maṇḍalavāpisaṇṭhā-
naṃ titthaṃ eva vuccati. *payāgā*¹⁵ ti etam pi gaṅgāya ekaṃ titthaṃ
eva mahāpanādassa rañño gaṅgāyaṃ nimuggapāsādassa sopāna-

¹⁰ 以下の2偈はPTSのテキストに従った。

¹¹ ビルマ版はsundarikaṃ mapi. PTS版に従った。

¹² ビルマ版はpakkhando. PTS版に従った。

¹³ ビルマ版はpayāgā. PTS版に従った。

¹⁴ この偈は文法的に壊れている。以下の読みを案として提示する。

kiṃ sundarikā karissati kiṃ payāgo kiṃ bāhukā nadī ;

vāriṃ katakibbisam̐ naram̐ na hi nam̐ sodhaye pāpakammaṃ.

verim̐ (m. sg. N.) をvāriṃ (n.sg.N.) と読めばsodhayeが単数形であることに問題がなくなる。訳は「なぜなら水は悪業をなす犯罪者を浄めはしないから」となる。nam̐をnaram̐と同格ととるか、vāriṃと同格ととるかは迷うところである。

¹⁵ 聖典の読みを訂正したため不整合が生じている。

sammukhaṭṭhānaṃ, bāhukā sundarikā sarassatī bāhumatī ti imā pana catasso nadiyo.

ここで「アディカッカ」とは、沐浴に必要なもの（kakka=練粉）〔があること〕によって名を得た一沐浴場である。ガヤーとは円形の池の形をした沐浴場であると言われる。「パヤーガ」とは、これもガンガーの一沐浴場である。マハーパナーダ王のガンガーに沈んだ宮殿の階段の正面のところにある。バーフカー、スندگان、サラッサティ、バーフマティとは、これらは四つの川である。

ここではパヤーガは沐浴場として名が挙げられている。マハーパナーダ王については後述する。なお対応する漢訳資料¹⁶ではパヤーガに対応する語は見出されない。

1-2. Ja. VI. 198 (v. 857) (Bhūridatta-jātaka)

lokyam sajanam udakam, payāgasmiṃ patiṭṭhitam ;
ko maṃ ajjhoharī bhūto, ogāḷham yamunaṃ nadin ti.

世に尊ばれる水に浸かりつつ、パヤーガ沐浴場に坐って、ヤムナー川に潜っている私を飲みこむ者は誰か。

このパヤーガの註は以下である。

Ja-a. VI. 198 : tattha *lokyan* ti evaṃ pāpavāhanasamatthan ti lokasammataṃ. *sajantan* ti evarūpaṃ udakam abhisīncantaṃ. *payāgasmin* ti payāgatitthe.

ここで「世に尊ばれる」とは、このように悪を運び去ることができるという理由で世に尊ばれる。「浸かりつつ」とは、そのような水を頭に注ぎつつあるの意である。「パヤーガにおいて」とはパヤーガの沐浴場においての意である。

¹⁶ 『中阿含』(T1, 575a)、『梵志計水浄経』(T1, 843c)、『雑阿含』(T2, 321a)、『別譯雜阿含』(T2, 408b)、『增壹阿含』(T2, 573c)。

なお物語の中でも、獵師の婆羅門が「それ（悪の報い）がまだやっ
て来ないうちにヤムナー川に行って悪を運び去るパヤーガ沐浴場で悪の除
去を行おう」（yāva taṃ na āgacchati, tāvad eva yamunaṃ gantvā
payāgatitthe pāpapavāhanaṃ karissāmī”ti）と考える中にも言及がある。

ここでもパヤーガは沐浴場として言及されている。

ニカーヤにおいて見出されるパヤーガの用例は沐浴場の名としてのみ
ということになる。

もう一点、「パヤーガ」でなく「パーヤーガ」ではあるが、明かにパヤー
ガに関連する資料であるので以下に挙げる。

1-3. DN. II, 258 (Mahāsamaya-sutta)¹⁷

athāguṃ nāgasā nāgā vesālā sahatacchakā.

kambalassatarā āguṃ pāyāgā saha nātibhi.

yāmunā dhataratṭhā ca āgū nāgā yasassino;

erāvaṇo mahānāgo so p' āgā samitiṃ vanaṃ.

それからナーガサ龍たち、ヴェーサーラたちは、タッチャカ〔たち〕
とともに到来した。カンバラ、アッサタラ（単数）、パーヤーガたちは
親族とともに〔到来した〕。名声ある龍たちであるヤームナ〔たち〕と
ダタラッタ〔たち〕とが到来した。かのエーラーヴァナ大象も集会のあ
る森に到来した。

ここの「パーヤーガ」に付された註は以下である。

¹⁷ この資料については丘山新他（2001、288-291、注47-65）、Skilling（1994、420-
421）が参考になる。なお梵本（*Mahāsamāyasūtra*）では以下のようにになっている。
SANDER, Lore. 1987. *Nachträge zu "Kleine Sanskrit-Texte Heft III-V"* (= Monog-
raphien zur indischen Archäologie, Kunst und Philologie, 3) . Wiesbaden : Franz
Steiner. ただし掲示したテキストはSuttacentral (<https://suttacentral.net/skt/sf140>)
による。

āgataḥ sahabhuṃ nāgo vaiśālā cāpī takṣakaḥ
kambalāśvatarāḥ prāptaḥ prajāguś ca guṇā saha
saudāsako dhṛtīrāṣṭro … pati kuñjarāḥ
airāvaṇo mahābhīṣmaḥ prāpto nāgo yaśasvī mamā …

DN-a. II, 688 : *athāgum nāgasā nāgā, vesālā sahatacchakā* ti nāgasadahavāsikā ca vesālīvāsikā ca nāgā saha tacchakanāgaparīsāya āgatā ti attho. *kambalassatarā* ti kambalo ca assataro ca. ete kira sinerupāde vasanti, supaññehi pi anuddharaṇīyā mahesakkhānāgā *pāyāgā saha nātibhī* ti payāgatitthavāsino ca saha nātisaṅghena āgatā.

yāmunā dhataratthā cā ti yamunavāsino ca dhataratthakule uppannā nāgā ca. *erāvaṇo mahānāgo* ti erāvaṇo ca devaputto, jātiyā nāgo na hoti. nāgavohārena pan' esa vohariyati. *sopāgā* ti so pi āgato.

「それからナーガサ龍たち、ヴェーサーラたちは、タッチャカ〔たち〕とともに到来した」とは、ナーガサ湖に住む龍とヴェーサーラーに住む龍が、タッチャカ龍の衆とともに到来したの意である。「カンバラ、アッサタラ」とはカンバラとアッサタラである。この二匹（カンバラとアッサタラが龍であるとは明示されていないがそう理解する）は須弥山のふもとに住む。金翅鳥によっても持ち上げられない大威力の龍である「パーヤーガたちは親族とともに」とはパーヤーガtitthaに住む〔龍〕が親族の衆とともに到来したの意である。

「ヤムナとダタラッタ」とはヤムナー川に住む龍たちとダタラッタ族に生まれた龍たちである。「エーラーヴァナ大象」とはエーラーヴァナ天子は生まれは龍ではない。しかし名前が「龍」なのである¹⁸。「彼も到来した」とは彼も到来したの意である。

パーヤーガとはパーヤーガに住む龍とのことである。ここでもパーヤーガはtitthaである。

2. 諸atthakathāの理解

諸註釈書には以下の形が見出される。上に紹介したものは省く。

¹⁸ エーラーヴァナはもとマガダ王の象であった。帝釈天の前生であるマガ (Magha) に与えられ、マガらとともに三十三天に生まれ変わってからは普通に神である。しかし神々がドライブに出かける時には巨大な象の姿をとって乗り物になる。

2-1. payāga単独

上に見たもので全てである。

2-2. payāga-tittha

上の2件（1-2の*payāgasmin* ti *payāgatitthe*と1-3の*payāgatittha-vāsino*）以外ではTh-aとAp-aに見出される。

Th-a. I. 115-116 : cāle upacāle ti āyasmato khadiravaniiyarevatattherassa gāthā. kā uppati?ayaṃ kira padumuttarassa bhagavato kāle haṃsavatīnagare titthanāvīkakkule nibbattitvā mahāgaṅgāya payāgatitthe titthanāvīkammaṃ karonto ekadivasaṃ sasāvakaśaṅghaṃ bhagavantaṃ gaṅgātīraṃ upagataṃ disvā pasannamānaso nāvāśaṅghāṭaṃ yojetvā mahantena pūjāsakkārena paratīraṃ pāpetvā aññataraṃ bhikkhuṃ satthārā āraññakānaṃ aggaṭṭhāne ṭhapiyamānaṃ disvā tadatthaṃ patthanaṃ paṭṭhapetvā bhagavato bhikkhusaṅghassa ca mahādānaṃ pavattesi. bhagavā ca tassa patthanāya avajjhābhāvaṃ byākāsi.

「チャーラよ、ウパチャーラよ…」〔ではじまる偈（Th. v. 42）は〕カディラヴァニヤレーヴァタ長老の偈である。何が〔この偈〕の起源か。彼（カディラヴァニヤレーヴァタ長老）はパドゥムツタラ世尊の時代にハンサヴァティーの都の渡し守の家に結生し、大ガンガーのパヤーガ渡し場において渡し守の業を行いつつ、ある日、声聞サンガをとまなう世尊がガンガーの岸にやってくるのを見て、心が清まり、舟筏を結び、大きな供養と尊敬とをもって向こう岸に渡し、ある比丘を師が阿蘭若住者の比丘たちの第一位に就けるのを見て、そのために希求を起こし、世尊と比丘サンガとに大布施を行ったそうだ。世尊は彼の希求が無駄にならないことを授記した¹⁹。

Ap-a. 302 : gaṅgā bhāgīrathī nāmā ti-ādikaṃ āyasmato khadiravaniiyattherassa apadānaṃ. ayam pi purimabuddhesu

¹⁹ Ap-a p. 302もほぼ同じ記事である。payāgatitthaも同じ。

katādhikāro tattha tattha bhave vivaṭṭūpanissayāni puññāni
 upacinanto padumuttarassa bhagavato kāle haṃsavatīnagare
 titthanāvīkākule nibbattitvā mahāgaṅgāya payāgatitthe titthanāvāya
 kammaṃ karonto ekadivasam sasāvakaśaṅgham bhagavantaṃ
 gaṅgātīraṃ upagataṃ disvā pasannamānaso nāvāśaṅghāṭaṃ yojetvā
 mahantena pūjāsakkārena paratīraṃ pāpetvā aññataraṃ bhikkhuṃ
 satthāra āraññakānaṃ bhikkhūnaṃ aggaṭṭhāne ṭhapiyamānaṃ disvā
 taṃ ṭhānantaraṃ patthetvā bhagavato bhikkhusaṅghassa ca
 mahādānaṃ pavattetvā pañidhānaṃ akāsi. Bhagavā tassa patthanāya
 avañjhabhāvaṃ byākāsi.

「バーギーラティーという名のガンガーは…」ではじまるのは、カディ
 ラヴァニヤレーヴァタ長老のアパダーナである。彼も、諸過去仏のもと
 で奉仕行を行い、それぞれの生涯で脱輪廻の機縁となる功德を積みつつ、
 パドゥムツタラ世尊の時代にハンサヴァティーの都の渡し守の家に結生
 し、大ガンガーのパヤーガ渡し場において渡し守の業を行いつつ、ある
 日、声聞サンガをとまなう世尊がガンガーの岸にやってくるのを見て、
 心が清まり、舟筏を結び、大きな供養と尊敬とをもって向こう岸に渡し、
 ある比丘を師が阿蘭若住者の比丘たちの第一位に就けるのを見て、その
 地位を希求し、世尊と比丘サンガとに大布施を行った。世尊は彼の希求
 が無駄にならないことを授記した。

上記2つの記事の内容は、後に見るAN-a. I 224のものもほぼ同じで
 ある。

なおこの最初のAp. I. 51 : Khadiravaniyarevatatthera-apaḍānaṃの
 偈は以下である。非常に難解であるため試訳を試みたい。ただしAp-a
 (303)の説明は一部採用したのみである。

gaṅgā bhāgīrathī nāma, himavantapabhāvitā²⁰ ;

kutitthe nāviko āsiṃ, orime ca tariṃ ahaṃ.

バーギーラティーという名のガンガーが、雪山によって〔水かさを〕
 増す〔ところ〕、〔その〕小さな渡し場で私は渡し守であった。〔ハンサヴァ

²⁰ ビルマ版はhimavantā pabhāvitā

ティー側おそらくPatiṭṭhāna側の〕此岸で私は渡し守業を行っていた（パヤガ側＝向こう岸から人々をこちらに渡した）。

2-3. payāga-patiṭṭhāna

Spのものの上に見たが、以下に見るようにその他の諸註釈書では payāga-patiṭṭhānaはnagaraあるいはgāmaの名、そしてtitthaの名とされる。

DN-a. III 856 : tasmim devaloke nibbatte so pāsādo mahāgaṅgāya anusotaṃ pati. tassa dhurasopānasammukhaṭṭhāne payāgapatiṭṭhānaṃ nāma nagaraṃ māpitaṃ. thupikāsammukhaṭṭhāne koṭigāmo nāma. aparabhāge amhākaṃ bhagavato kāle so naḷakāradevaputto devalokato cavitvā manussapathe bhaddajiseṭṭhi nāma hutvā satthu santike pabbajitvā arahattaṃ pāpuṇi. so nāvāya gaṅgātaraṇadivase bhikkhusaṅghassa taṃ pāsādaṃ dassētī ti vatthu vitthāretabbaṃ. kasmā pan' esa pāsādo na antarahito ti? itarassa ānubhāvā. tena saddhim puññaṃ katvā devaloke nibbattakulaputto anāgate saṅkho nāma rājā bhavissati. tassa paribhogatthāya so pāsādo uṭṭhahissati, tasmā na antarahito ti.

彼（バツダジ長老の前生マハーパナーダ王）が天界に〔ナラカーラ天子として〕結生した時に、かの（ヴィッサカンマがマハーパナーダ王のために作った25由旬の高さで百階建ての）宮殿は大ガンガーの流れに沿って倒れて〔沈んだ〕。その〔宮殿の〕階段の下の正面に「パヤガ・パティッターナ」というナガラ（単数）が作られた。宮殿の尖頂の正面に「コーティガーマ」〔という名の村が作られた〕²¹。後に我々の世尊（釈尊）の時代にかのナラカーラ天子が天界から死没して人道において「バツダジ長者」になって師のもとで出家して阿羅漢果を得た。彼（バツダジ長老）は舟でガンガーを渡った日に比丘サンガにその宮殿を示したと、この事は詳述されるべきであるが〔今は略す〕。何故その宮殿は消えな

²¹ Koṭigāmaの現在の地の比定の参考資料たり得るか？ イッラーハーバードからガンガー沿いに25由旬の距離（pañcavīsatiyojanubbedhaṃ）。

(70)

かったのか。未来の人物の威神力による。彼（マハーパナーダ→バグダジ）とともに功徳を積んで天界に結生した善男子（マハーパナーダ王が前生で葦細工人であった時にその父であった人物。父は息子がマハーパナーダ王であった間も天界にあった）が未来に「サンカ」という王になるであろう。彼がその宮殿を用いるためにその宮殿は起き上がるであろう。それゆえ消えなかったのである²²。

ここではパヤーガ・パティッターナは二つではなくて一つの都（nagara）の名ということになる。

tīkā文献になるが、以下のように説明している。

Vmv : payāgapatiṭṭhānan ti gaṅgāya ekassa titthavisesassā pi, taṃsamīpe gāmassā pi nāmaṃ.

「パヤーガ・パティッターナ」とは、ガンガーのひとつの勝れたtitthaの名でもあるし、それに隣接した村の名でもある。

Sp-ṭ : payāgapatiṭṭhānan ti gāmassa pi adhivacaṇaṃ titthassa pi.

「パヤーガ・パティッターナ」とは、村の名でありtitthaの名でもある。

ここでも村とした場合、二つではなくて一つ村の名としていることに注目したい。

2-3. payāga-patiṭṭhāna-tittha

AN-a. I 224 : ayaṃ kira atīte padumuttarabuddhakāle haṃsavatīnagare nibbatto mahāgaṅgāya payāgapatiṭṭhānatitthe nāvākammaṃ karonto paṭivasati. tasmaṃ samaye satthā satahassabhikkhuparivāro cārikaṃ caranto payāgapatiṭṭhānatitthaṃ sampāpuṇi. so dasabalaṃ disvā cintesi – “mayhaṃ kālena kālaṃ buddhadassanaṃ nāma n’ atthi, ayaṃ me kalyāṇakammāyūhanakkhaṇo”ti nāvāsaṅghāṭaṃ bandhāpetvā upari celavitānaṃ kāretvā gandhamālādāmāni osāretvā heṭṭhā varapotthakaṃ

²² Ja IV 314-325 (No. 489, Suruci-jātaka)、八尾 (2013, 102-105) 参照。

cittattharaṇaṃ attharāpetvā saparivāraṃ satthāraṃ paraṭīraṃ tāresi.

彼（カディラヴァニヤレーヴァタ長老の前生）は、過去世においてパドムツタラ仏の時代にハンサヴァティー・ナガラに結生し、大ガンガーの**パヤーガ・パティッターナ渡り場**において渡り守をしながら住んでいたそうだ。その時、師は百千の比丘に囲まれて遊行を遊行し、パヤーガ・パティッターナ渡り場に到着した。彼は十力を見て「私が仏にまみえることなんてめったにない。今が私が善業を遂行するチャンスだ」と〔考えて〕、舟筏を結んで、その上に天幕を張って、香・華蔓を置き、下に最上の生地の色した敷物を敷いて取り巻く〔比丘〕とともに師を向こう岸に渡した（以下は略す。物語は先に見た2-2に同じ）。

3. 『マハーバーラタ』の記事

『マハーバーラタ』に複合語ではないが、プラヤーガ（Prayāga）とプラティシュターナ（Pratiṣṭhāna）と一緒に言及する箇所がある。

tato gaccheta rājendra prayāgam ṛṣisamstutam/
yatra brahmādayo devā diśas ca sadigīśvarāḥ// 3, 83. 65

それから、王中の王よ、聖仙が讃えるプラヤーガに行くべきである。梵天をはじめとする神々、方位神をとまなう諸方位、

lokapālās ca sādhyās ca nairṛtāḥ pitaras tathā/
sanatkumārāpramukhās tathāiva paramarṣayaḥ// 3, 83. 66

世界守護神たち、サーディヤ神群、ナイルリタ神群、祖霊たち、サナトクマーラをはじめとする最高の聖仙たち、

aṅgiraḥpramukhās caiva tathā brahmarṣayo 'pare/
tathā nāgāḥ suparṇās ca siddhās cakracarās tathā// 3, 83. 67

アンギラスをはじめとする梵仙たち、竜たち、スパルナたち、シグダたち、チャクラチャラたち、

saritaḥ sāgarās caiva gandharvāpsarasas tathā/
hariś ca bhagavān āste prajāpatipuraskṛtaḥ// 3, 83. 68

諸川、諸海、ガンダルヴァ、天女たち、造物主をはじめとする聖なるハリが坐すところ、

(72)

tatra trīṇy agnikuṇḍāni yeṣāṃ madhye ca jāhnavī/
prayāgād abhiniṣkrāntā sarvatūrthapuraskṛtā// 3, 83. 69

それらの方々が坐すところには、三つの火坑があり、そしてそれらの中間において、すべての沐浴場を有するジャーフナヴィー（ガンガー）がプラヤーガから流出する。

tapanasya sutā tatra triṣu lokeṣu viśrutā/
yamunā gaṅgayā sārđhaṃ saṃgatā lokapāvanī// 3, 83. 70

世界を浄化する、三界に名高い太陽の娘ヤムナーが、そこ（プラヤーガ）でガンガーと合流する。

gaṅgāyamunayor madhyaṃ pṛthivyā jaghanaṃ smṛtam/
prayāgaṃ jaghanasyāntam upastham ṛṣayo viduḥ// 3, 83. 71

ガンガーとヤムナーの間は、大地の女陰であると伝えられている。プラヤーガを女陰の端の陰核であると聖仙たちは考えた。

prayāgaṃ sapraṭiṣṭhānaṃ kambalāśvatarau tathā/
tūrtham bhogavatī caiva vedī proktā prajāpateḥ// 3, 83. 72

プラヤーガとプラティシュターナ、カンバラとアシュヴァタラ、そしてポーガヴァティの沐浴場は、造物主の祭壇であると言われている。

tatra vedās ca yajñās ca mūrtimanto yudhiṣṭhira/
prajāpatim upāsante ṛṣayaś ca mahāvratāḥ/
yajante kratubhir devās tathā cakracarā nṛpa// 3, 83. 73

ユディシュティラよ、そこ（プラヤーガ）では、具現化した諸ヴェーダと諸祭祀とが、大誓戒を保つ聖仙とともに造物主に仕える。王よ、諸祭祀によって神々とチャクラチャラたちが供犠を行う。

tataḥ *puṇyataram²³ nāsti triṣu lokeṣu bhārata/
prayāgaḥ sarvatūrthebhyaḥ prabhavaty adhikaṃ vibho// 3, 83. 74

バーラタよ、それよりも神聖なものは三界にない。王よ、プラヤーガはすべての沐浴場よりも甚だ勝れている。

śravaṇāt tasya tūrthasya nāmasaṃkīrtanād api/
mṛttikāmbhanād vāpi naraḥ pāpāt pramucyate// 3, 83.75

その沐浴場について聞くか、名を讃えるか、土に触れるかするだけで

²³ 底本puṇyatamaṃ。特に異読の支持はないが訂正する。

も、人は罪から解放される。(以下略す)

4. payāga-patiṭṭhānaとは何か (むすびにかえて)

上記『マハーバーラタ』の3, 83. 72のprayāgaṃ sapraṭiṣṭhānaṃが「プラティシュターナをとまなうプラヤーガ」と読み得ることが payāgapatiṭṭhāna という複合語を説明してくれるのではなからうか。

なお同偈の kambalāśvatarau が 1-3 の Mahāsamayasutta の kambalāśvatarā (*Mahāsamājasūtra* では kambalāśvatarah) と一致していることも興味深い²⁴。

現在、Jhūsī が イッラーハーバード district に含まれているように²⁵、古くから Prayāga は ガンガー を挟んで対岸の Pratiṣṭhāna を含んでおり²⁶、それが Payāga-Patiṭṭhāna を一つの nagara もしくは gāma とする説明に反映していると考えられないであろうか。

なお Payāga-Patiṭṭhāna を nagara とするのは 過去世の Mahāpanāda 王の文脈のみである。gāma と説明する Vin の註釈類 (Sp, Sp-ṭ, Vmv) が、nagara とする伝承も知っていたとするならば、古くは nagara であったものが 釈尊の時代にはもはや nagara ではなく gāma になっていたことを意図したものであろうか。

Khadiravaniyarevata 長老の前生 (Padumuttara 仏の時代) は Payāga-Patiṭṭhāna は たんに Payāga-tittha とされ、替わりに Hamsavatīnagara が言及される。この Hamsavatīnagara は 聖地の Hamsapratapana と関連が

²⁴ Dubey (2001, 34) に 諸 プラーナ を はじめ とする ヒンドゥー 教 諸 文 献 に おける 'the site of the Kambalāśvatarā Nāgas' の 説 明 あり。

²⁵ Dubey (2001, 34-37)。一例として プラティシュタンプル・スクール (パブリック スクール) の 所 在 を 確 認 さ れ たい。

<http://www.studyapt.com/school-ps-pratisthan-pur-allahabad>

<http://www.icbse.com/schools/ps-pratisthan-pur/09450806601>

²⁶ Dubey (2001, 35-36) は「プラティシュターナはプラヤーガの最も重要な場所であった (Pratiṣṭhāna was the most important locality of Prayāga.) と述べ、それにも拘わらず法顕、玄奘、Alexander Cunningham が Jhūsī を訪れなかったことを指摘している。

(74)

あるのではないかと思われる²⁷。

さて渡し場の名としてのPayāga-Patiṭṭhānaである。2-2 (Th-a, Ap-a) のPrayāga-titthaはガンガーを渡る渡し場であるが、1-2 (Ja) のPrayāga-titthaはヤムナー川に接している。PayāgaからYamunā川を渡る渡し場もあったであろうから、Payāga-Patiṭṭhānaと名づけられることで渡る方向を特定していたのではなかろうか。

最後にVinの文章にもう一度戻って考えてみると

「それから世尊はヴェーランジャーに随意の間住し、ソーレッヤ、サンカッサ、カンナクツジャに立ち寄らずに、パヤーガ・パティッターナ[村]に近づいた。近づいてからパヤーガ～パティッターナ^{かん}[間の渡し場]においてガンガー川を渡り、ヴェーサーリーに至った

と訳出できるかもしれない。

参考文献表

- 赤沼智善. 1967. 『印度佛教固有名詞辞典』(複刊) 法蔵館
丘山新他. 2001. 『現代語訳「阿含経典」—長阿含経』第4巻
八尾史. 2013. 『根本説一切有部律薬事』連合出版
DPPN = Malalasekera, G. P. *Dictionary of Pāli Proper Names*, PTS.
Dubey, D. P..2001. *Prayāga, the Site of Kumbha Melā (in Temporal and Traditional Space)*, New Delhi.
Neelis, Jason. 2011. *Early Buddhist Transmission and Trade Networks, Mobility and Exchange within and beyond the Northwestern Borderlands of South Asia*. Brill.
Rhys Davids, T. W. 1903. *Buddhist India*, London.
Skilling, Peter. 1994. *Mahāsūtras: Great Discourses of the Buddha*, Volume I : Texts, PTS.

²⁷ Dubey (2001, 33-34) によればHamsapratapanaはPratiṭṭhānaの北、Bhāgīrathī川の東に位置した。